日向国延岡藩内藤充真院の旅日記から見る関心と人物像

――「五十三次ねむりの合の手」を素材として――（1）

神崎直美

はじめに

本稿は、日向国延岡藩（譜代・七万石）藩主内藤政順の夫人であった充真院の人物像を明らかにする一端として、充真院がしたためた旅日記を分析するものである。

充真院は、晩年であった幕末から明治時代初頭において、江戸（東京）と延岡の間を四回も旅をしており、その都度、旅の見聞を日記体の紀行文としてまとめている。これらの旅日記の存在、およびその内容については、既に近世史・女性史の分野で紹介されている[1]。充真院の紀行文は、大名家の女性の旅日記のなかで、代表的なものの一つであり、かつ充真院が優れた書き手であったことが知られている。

本稿はそのなかでも、初めての旅についてまとめた「五十三次ねむりの合の手」を素材として検討を進める。まず、充真院が作成した四点の旅日記の中で「五十三次ねむりの合の手」の位置づけを考察したうえで、「五十三次ねむりの合の手」とは如何なる旅日記なのか、テキストに対する検討を行う。そしてこの旅の概要と注目すべき事項を明らかにし、さらに充真院が旅においてどのようなことに興味・関心を示していたのかということを分析することにより、充真院とは如何なる人物であったのか、その感性や心情などから人物像を解明してみたい。

（1）内藤充真院の旅日記は、平成六年に宮崎県立図書館編として『内藤充真院道中記』が翻刻・刊行された。これは、充真院の旅日記のうち「五十三次ねむりの合の手」と「海陸返り咲ことはの手拍子」の二点を収載したものである。その後、平成九年に、柴桂子氏が『近世おんな旅日記』〈歴史文化ライブラリー13〉（吉川弘文館）の八九頁から九六頁で、充真院の旅日記うち「五十三次ねむりの合の手」についてその梗概を示し、「海陸返り咲こと葉の手拍子」の序文の一部を掲げて

紹介している。その後、同十二年に明治大学博物館編として充真院の旅日記四点の全文が『内藤家文書増補・追加目録8　延岡藩主夫人内藤充真院繁子道中日記』として刊行された。この四点の日記については、同十三年に同じく明治大学博物館編である『内藤家文書増補・追加目録9　延岡藩主夫人　内藤充真院繁子著作集1』の文末の解説に簡潔な説明がある。同十七年には、前述の柴氏が『近世の女旅日記事典』（東京堂出版）で充真院の旅日記四点を部分的に翻刻し、解説を添えて紹介している。日記そのものを対象として分析した論文は、平成十七年に伊能秀明氏が「幕末東海道おんな道中記『五十三次ねむりの合の手』――日向延岡藩主夫人内藤充真院旅日記の可笑しさについて――」（『明治大学博物館研究報告』第十号）で、主として旅の前半部分である東海道を陸路で下った折の記述を素材として、充真院の文章の巧みさや可笑しみを指摘されている。なお、以下の本稿で右の伊能氏の論文についてふれる際に、伊能氏論文と略記する。

一　充真院の四点の旅日記について

まず、充真院の手による旅日記について、簡単に紹介しておきたい。四点の旅日記を成立した順に示すと、本稿で検討する素材である「五十三次ねむりの合の手」をはじめとして、「海陸返り咲こと葉の手拍子」「三下りうかぬ不調子」「午ノとし十二月より東京行日記」となる。いずれも現在、明治大学博物館が所蔵している。[1]

四点の旅日記に共通することは、旅の過程を日毎にしたためた、日次の形式をとっていることである。さらに四冊の旅日記とも、旅を終えた後日に改めて清書して冊子にまとめたものと思われる。その理由は、一冊を通して筆致が一定していることや、随所に描かれた挿絵の配置も極めて的確な位置であり、かつ工夫が伺われ、あらかじめ十分に考えられた感があるからである。さらに、文字数に対して修整した箇所が少ないことにもよる。[2]

この旅日記は、充真院が紀行文を後日にまとめることを明確に意識して旅をし、その結果としてまとめた、まさしく作品というべきものである。「五十三次ねむりの合の手」を例として見てみよう。この旅日記は冒頭から文末まで、終始一貫して詳細に旅の見聞と自らの思いを克明に綴り続けている。天候も克明に記録してある。これは旅の始めから、旅日記をしたためることを意識していたからこそである。さらにそのために手控えを作成していたからこそ可能となったのである。旅を進めながら、常に身近な読者を想定しつつ、備忘のために筆を進めたのであろう。

さらに、五月二十三日から二十五日までのどこか一日に該当するであろう箇所に注目したい。冒頭に「廿　日」と「廿」と「日」の間を一字分開けて記載している。もっとも内容の記述そのものは一日分について記したようである。これは、まさに現存する旅日記が、旅の道中に書かれたそのものではないことを示していよう。備忘としてしたためていたものを基にして、旅を終えてから清書してまとめる際に、この日付の記載が備忘にしっかりと記載されておらず、日にちを確定することができなかったため、不明な点は空欄としておいたのである。[3]

加えてこの旅日記の文末に、「日も所も跡先うろおほへ乍、まつ覚しまゝの所計、少しかたはし計知りけれと、段々うろ覚、おほろけなる心地す」とある。[4] 旅を終えて、旅での様々な出来事や日次などがうろ覚えとなっているが、まず覚えていることをしたためておく、旅の日々も遠いことと感じられるようになったと、感想を記してある。したがって、旅日記は五十五日間もの長旅を終えた時点、すなわち出発した四月六日を思いおこすと、もはやはるか遠い出来事のように感じられる頃に、備忘としてしたためていた文章を見ながらまとめ直したのであろう。備忘としての手控えそのものは、現在、確認されていないが、これ程長期な旅にも関わらず、極めて克明な記録であるので、間違いなく存在していたものとみなしてよかろう。

もう一つ、注目しておきたい点は、充真院にとって、旅とは道中の過程であることに加えて、延岡に到着して生活を始めてから当地ではじめて見聞した事物もたいへん珍しい事項であり、それらを未知なる見聞の連続であった旅と同様に意識していたことである。江戸で生まれ育った充真院にとって、延岡は内藤家の領国とはいえ、はじめて足を踏み入れた見知らぬ土地であり、そこに居を移してからの見聞も、旅と同等に新鮮かつ興味深く感じていたようなのである。

それは、「五十三次ねむりの合の手」に、延岡に到着した後の七月十日、八月二十六日、九月一日、十月九日など、四日間の見聞も併せて記載していることによる。[5] 具体的には、七月十日は四万六千日の観音参詣として台雲寺に出かけた事であり、八月二十六日は松山の五ヶ瀬川に仕掛けた簗猟の見学、九月一日は岡富村惣領での農作業や農民の踊りの見学、十月九日は延岡城内に入ってきた今山八幡宮の祭礼を見学したことなどである。[6]

注目したい点は、この延岡に関する四日分の記事は、そのうち三日分に挿絵がついていることである。挿絵は簗猟の様子、農村見学は千羽こきや唐箕、千石通しなど収穫の際に使用する道具と農民らが踊りに用いた太鼓とその踊りの様子、今山八幡宮祭礼は延岡城内に入ってきた山車や旗指物を三本ずつ背負った人々の行列などである。延岡で生活を始めてからの見聞はわずか四日分であるが、挿絵を描いた率は実に高い。

右の見聞を体験した場所は、延岡城内に加えて、台雲寺・松山・岡富村惣領などいずれも延岡での充真院の居所から程近い場所である。しかしながら、延岡で見た事物は、長い人生を経てきた充真院においても、はじめて目にするものばかりであった。これらは、およそ二ヶ月弱をかけた江戸・延岡間の道中における見聞と並ぶ程、充真院の絵心を揺さぶる興味深い見聞であったからこそ、旅日記の末尾に丁を改めながらも目にした事項を文章として綴り、挿絵も添えたのである。

さらに、延岡から江戸へ向かう旅についてまとめた「海陸返り咲こと葉の手拍子」と「午ノとし十二月より東京行日記」では、延岡

を出発する以前の様子から記載している。延岡を出発する以前から記載しているのは、一つには江戸に戻ることがうれしくてたまらないため、既に心が旅路にある充真院の思いの反映である。出発以前からその過程を書き留めているのは、これからの旅に向けた準備の期間も、非日常的な日時として意識しているゆえとみなせよう。

四点の旅日記の記述量を比較すると、丁数として最も多いのは「五十三次ねむりの合の手」の八十六丁、「海陸返り咲こと葉の手拍子」の八十四丁で、「午ノとし十二月より東京行日記」の二十九丁、「三下りうかぬ不調子」の十七丁であるが、[7] 丁に配した文字数・挿絵の量としては、「海陸返り咲こと葉の手拍子」が最も多く、「五十三次ねむりの合の手」がこれに僅差で続き、「午ノとし十二月より東京行日記」「三下りうかぬ不調子」の順となる。[8]

いずれにしても、初めての江戸から延岡への往路・復路の旅日記である「五十三次ねむりの合の手」と「海陸返り咲こと葉の手拍子」が、二度目の往路・復路の旅日記である「三下りうかぬ不調子」と「午ノとし十二月より東京行日記」よりも格段に記載量が多いのである。

はじめての往路・復路は、やはり初の経験であり目にするもの万事が新しいということゆえであろう。それに対して、二度目の往路・復路は、既に見知った事項であり、目新しさをさほど感じなかったこと、および既に一度目の往路・復路の旅日記に記しているので、あえてしたためる必要を感じず省略してしまったこともあったからであろう。

次に旅に出た期間に注目してみよう。長い順に示すと、「海陸返り咲こと葉の手拍子」は六十九日、「三下りうかぬ不調子」は五十九日、「五十三次ねむりの合の手」は五十五日、「午ノとし十二月より東京行日記」は三十一日である。[9]

それぞれの旅日記に記載した日数は、「三下りうかぬ不調子」は旅の期間のみを記載しているが、他の旅日記は旅の期間に加えてその前後に関する記載をも含んでいる。期間が長い順に示すと、「海陸返り咲こと葉の手拍子」が七十五日、「五十三次ねむりの合の手」は六〇日、「三下りうかぬ不調子」は五十九日、「午ノとし十二月より東京行日記」は四十四日である。

したがって、記載量は旅の期間を直接反映しているのではなく、旅の期間に反映しながらも、目新しい見聞による興味・関心の度合いが加わり、それに伴い紙数が増えたといえよう。ゆえに、初めての往路・復路では、旅日記の紙数を費やしたといえよう。

以上のことをふまえると、「五十三次ねむりの合の手」は、旅の期間こそ、四度の旅のうち三番目の長さでありながら、記載日は二番目に多く、かつ初めての大旅行であったため、書き留めた内容量が多く豊かであり、最も新鮮な見聞録としてその内容が期待できるのである。

（1）　充真院の旅日記の架号は、『内藤家文書増補・追加目録⑸内藤政道

氏寄贈書』の⑵充真院（繁子）関係（Ⅰ）で、「五十三次ねむりの合の手」が一二、「海陸返り咲こと葉の手拍子」が一三、「三下りうかぬ不調子」が一五、「午ノとし十二月より東京行日記」が一六である。これらの旅日記は、冒頭の「はじめに」の註(1)でも紹介したように『内藤家文書増補・追加目録８　延岡藩主夫人　内藤充真院繁子道中日記』（明治大学博物館編集、平成十二年）に全文が翻刻されている（当本について以下の本稿では「明大翻刻本」と略記する）。さらに「五十三次ねむりの合の手」と「海陸返り咲こと葉の手拍子」は『内藤充眞院道中記』（宮崎県立図書館編、平成六年）にも翻刻されている。

なお、従来の翻刻本はいずれも「海陸返り咲ことはの手拍子」と表記しているが、柴氏は『近世おんな旅日記』と『近世の女旅日記事典』で、原文に忠実に「海陸返り咲こと葉の手拍子」と表記している。私も原文に準じた表記を用いるべきであると考えるので、本稿では柴氏と同様に「海陸返り咲こと葉の手拍子」と表記する。ところで、「三下りうかぬ不調子」についても少しふれておきたい。この旅日記の題名は、「三下り」を「さんさがり」と読むべきである。従来の読み方としては、柴氏の『近世の女旅日記事典』の作品索引を見ると、三三二頁の「み」の項目に配置されており、「みくだり」と読まれたようである。しかしながら、この題名の読み方は「さんさがり」と読むべきである。その理由は、充真院は三味線を好んでおり、それに由来して付した題名と思われるからである。三味線の調弦法に「三下り」、すなわち「さんさがり」という短調がある。せっかく戻ることができた懐かしい生まれ故郷である江戸から、また延岡に戻らねばならなくなり、がっかりして暗い気持ちで旅にのぞむ充真院の心情を、暗い調子の「さんさがり」にかけて表現した題名なのである。

四冊の旅日記の冊数、出発と到着の年次、目的地、『国書総目録』に記事が未掲載であること、挿絵の点数などについて、明大翻刻本の二六七～二六九頁に簡潔な説明がある。さらに、伊能氏論文の十七～十八頁でも紹介されている。ところで、本稿で「五十三次ねむりの合の手」について註記する際は、明大翻刻本の当該頁を示すこととする。引用に際しては、便宜的に読点を施した。

（2）尤も、四冊の旅日記のうち「五十三次ねむりの合の手」は清書としての完成度が高い。それと比較すると「海陸返り咲こと葉の手拍子」は、文章の修正が「五十三次ねむりの合の手」よりも目についたり、挿絵に小さな紙を張って修正した箇所があったり、さらには挿絵を描くはずだったらしい余白がそのままになっている箇所も見られ、清書としての完成度が低い部分もある。この点については、後日、別稿で改めてふれることとしたい。

（3）明大翻刻本、七三頁。同様に備忘が不徹底であり、後でまとめ直す際に支障があった点として、四月二十八日の大坂の四天王寺参拝の箇所が指摘できる。この文末で境内に所々御堂があるが「其節々にしるさゝれは忘れぬ」（右同書、四四頁）とある。

（4）右同書、八五頁・八七頁。八六頁が飛ぶのは、この頁全面が挿絵であることによる。

（5）右同書、八七～九四頁。

（6）ちなみに、十月九日に今山八幡宮の山車が延岡城内に入ったという「五十三次ねむりの合の手」の記述は、日本歴史地名大系四六巻『宮崎県の地名』（平凡社、平成九年）の一七三頁に掲載されている。なお、この農民踊りは「ばんば踊り」であると、明大翻刻本の二六六頁に記してある。

（7）本稿で指摘した丁数は、充真院が旅日記を作成した当時に綴じた際の料紙を全て数えた。したがって、冒頭の題名の箇所が一丁、次に綴じた白紙を二丁とし、次の本文からが三丁で、以下に続くこととなる。原本を確認する際に、全体の丁数を通して数えた方が間違いも無くわかり易いので、白紙も含めて丁を数えた。ところで、従来指摘された丁数としては、柴氏が、『近世の女旅日記事典』で指摘された数値がある。柴氏は右書の二十頁で「最初の延岡への旅日記が三九丁あるのに比べ」と述べ、「五十三次ねむりの合の手」は三十九丁であるといわれている。さらに、右書の十八頁で「海陸返り咲こと葉の手拍子」

は八十三丁、さらに二十頁で「三下りうかぬ不調子」は十六丁と指摘されていた。柴氏が指摘された「海陸返り咲きこと葉の手拍子」と「三下りうかぬ不調子」の丁数が、今回数えた丁数よりそれぞれ一丁少ないのは、墨付分の丁数を数えて白紙は数えなかったためであろう。したがって、右の二点の旅日記における柴氏と本稿との丁数の違いは、白紙の扱い方の差異であるため、特に問題ないものである。しかしながら、柴氏が指摘された「五十三次ねむりの合の手」の丁数は少なすぎ、おそらく数え違いというよりも、誤記か誤植なのであろう。

（8）実際の記載量については、これらの旅日記をA4版サイズの活字本にした明大翻刻本の頁数を目安として、以下に示しておこう。具体的には「五十三次ねむりの合の手」は八七頁、「海陸返り咲こと葉の手拍子」は九二頁、「三下りうかぬ不調子」は二〇頁、「午ノとし十二月より東京行日記」は三六頁である。

（9）今回の検討に際して、旅の期間を確認してみた。その結果、「五十三次ねむりの合の手」については、かつて柴氏が『近世おんな旅日記』九五頁で指摘されていた通り、五十五日間であった。一方、柴氏は「海陸返り咲こと葉の手拍子」については七十二日間、「三下りうかぬ不調子」は五十七日間であると、『近世の女旅日記事典』の十八頁と二十頁で示されているが、この日数は数え違いのようである。

二　「五十三次ねむりの合の手」について

前述したように「五十三次ねむりの合の手」は、充真院にとって初めての大旅行における旅日記である。しかもこの旅は江戸で生まれ育った充真院にとって、六十四歳にして初めての体験なのである。[1]まず、冒頭で旅をすることになった世情の理由やそれに対する心情、旅の準備と前日の様子から書き起し、以後は旅における見聞を日ごとにまとめ、長旅を終えた時点で一端筆を留め、旅全体についてまとめ直したようだが、その後、延岡で過ごした当初の見聞も若干ではあるが記している。したがって、まず冒頭で、文久二年（一八六二）に幕府の命令により、大名家の奥方たちは江戸を立ち去り領国に転居することになったため、旅に出ることになったと理由を明らかにしている。[2]日記としての記述は、同三年（一八六三）四月五日の出発前日の様子からであり、旅の初日である同月六日から延岡に到着した六月二日までと、前述したように延岡での見聞として七月十日、八月二十六日、九月一日、十月九日の四日分がある。[3]したがって、江戸から延岡までの旅の期間は、実質五十五日間であった。

この旅日記は、基本として日毎に記してある。したがって、一日ごとの始まりの記載には、概ね日付の記載があり、続いて天気を記す場合が多い。しかしながら極めて例外的であるが、記載方法が乱れた箇所も若干ある。一つは、四月十六日についてで、行を改めて冒頭に日にちを記さずに、前日の十五日の文章に続けて記述している。これは、十六日は朝早く出発することとなったため、十五日の夜は早く就寝して、翌日の十六日にまとめて二日分をしたためたようである。[4]

さらに、四月二十九日は大坂の内藤屋敷に滞在していた折で、外出しなかったため記載することがなく、前日の二十八日の記述の末尾に「夫よりは出す」と記して、日にちを省略してある。[5]

記載方法は、道中の過程に刻々と文章化したのではなく、主とし

て一日の終わりに宿でまとめて書いたようである。それは、各日の冒頭に記載した日付の次にしたためられた天候の記述から推測できる。一日のうち天気が変化した場合には、それら全てをまとめて記し、それに続けて一日の道中の様子を時間の経過と共に描写しているからである。例えば、四月二十二日であるが、日付の次に「朝曇、昼後大雨」と記載している[6]。さらに五月五日は「曇、昼小雨、夕天気」とある[7]。

この日記の特徴は、充真院の豊かな文章力と多数の挿絵である。その文章をたどってゆくと、感情が素直に表現されており、また、ところどころに充真院や一行の言葉が差し挟まれているので、臨場感を感じるのである[8]。まるで読み手も充真院らと共に旅をしているような感を受ける。この点は音読してみると、より強く実感できる。そして、後述するように、充真院の人物像が彷彿と浮かび上がってくるのである。

「五十三次ねむりの合の手」には、挿絵が都合六十五点もある[9]。そのうち五十四点が道中での見聞であり、残りの十一点は旅を終え延岡で生活を始めてから、延岡において見聞した事物を描いている。挿絵として描かれた対象について、表1にまとめてみた[10]。平塚（相模国）で漁師に見せてもらい、その名前を尋ねて知った嶋鯛をはじめとして、休憩した宿の建物や庭、宿からお土産としてもらった剣玉、参拝した寺社、陸路の風景、乗船した船、宿で充真院に懐いた幼女、蛍、女性の髪形、名物、海路の様々な風景、不思議な生き物などである。旅先で目にした実に様々な事物を描き込んでいるのである。描いた対象の傾向をおおざっぱにまとめると、風景や建物、珍しい事物といえよう。描いた対象は、とりわけ充真院の心に留まったものといえよう。

描くに際しては、いずれも細い筆を用いている。細密に丹念に描きこんだりする一方で、さらりと輪郭線のみで略して描く場合もある。描き方には一種のリズムがあり、充真院の個性といえる筆遣いを確立している。日頃から絵を描くことに親しんでいたからこそ成し得た筆致といえよう。

描く視点に注目すると、間取図をよく描いていることに気がつく[11]。間取図として描かれた対象は、休憩した宿（図1）や見学した寺社、利用した船などである。さらに、鳥瞰としての視点で、広い範囲で風景や寺社の境内を描いていることである。目線の高さで描く見取図は比較的少ない。尤も、多くの情報を描き込むには鳥瞰の視点が有効であるゆえ、鳥瞰を多用したのであろう。

なお、唯一の例ではあるが、いわゆる吹抜屋台の視点で描いた挿絵もある（図2）。これは五月十二日に金刀比羅宮（讃岐国）を参拝した時に、充真院は疲労が甚だしかった為、寺側が便宜を図ってくれて、休息用に通された御簾を懸けた立派な部屋を描いたものである。疲労困憊して具合が悪かったとはいえ、それでもしっかりと部屋の間取りなどを観察していた点は、実に充真院らしいといえよう。

番号	対　　象	月　日	場　所	備　　考（描写など）	原本丁	復刻本頁
35	明石湊	5月9日	明　　石	見開き（左丁上半分・右丁左半分）	53裏・54表	58，59
36	亀嶋と日の出	〃 10日	灘	部分彩色（太陽に朱，海に薄藍）	54裏	59
37	亀の手（貝類）	〃 11日	赤穂坂越	対象の名称は記載なし	55表	60
38	海	〃 12日	備前大楯	見開き（両丁上半分）	55裏・56表	61，62
39	書院と経堂間の流れと朱の橋など	〃	讃　岐 金刀比羅宮		59裏	65
40	金光院玄関	〃	〃	部分彩色（植え込みに朱・紫・薄緑）	59裏	65
41	本坊内	〃	〃	間取図	60裏	66
42	本坊内の休憩した座敷	〃	〃	吹抜屋台	60裏	66
43	海辺と生箕	〃 17日	六　　嶋	1丁分	63表・裏	68，69
44	石垣と海	〃 19日	鞆ノ浦		65表	71
45	海と日の出	〃 20日	〃		65裏	71
46	浜辺	〃	糸　　崎	丁の左に縦書	66表	72
47	〃	〃23～25日	下　　苗	1丁分	67表・裏	73，74
48	浜辺の岩山2つと富士の様な山	〃	〃		69表	75
49	奇妙な烏賊の様な物	〃 26日	雲　　汨	文中に描く	69表	76
50	奇妙な栄螺に足の付いた物	〃	〃	〃	69表	76
51	嶋ノ浦入港	〃 19日	嶋野浦	見開き（左丁下右半分・右丁下半分）	70裏・71表	78，79
52	芹崎からの展望	〃	日向灘	〃（両丁下半分）	71裏・72表	78，79
53	小船船内	6月2日	川　　口	略図	77表	84
54	内藤家延岡屋敷	〃	延　　岡		78表	86
55	松山神明宮	8月26日	松　　山	（以下，旅の後日の見聞）	81裏	88
56	簗漁	〃	五箇瀬川	鳥瞰図	82表	89
57	千刃扱き	9月1日	岡富村惣領	略図	83裏	91
58	唐箕	〃	〃	〃	84表	91
59	磨臼	〃	〃	〃	84裏	92
60	千石通し	〃	〃	〃	84裏	92
61	1俵を整える箱	〃	〃	〃	84裏	92
62	農民の太鼓	〃	〃	〃	85表	92
63	農民の祝い	〃	〃	〃	85表	93
64	今山八幡宮祭の山車	10月9日	延岡場内		85裏	93
65	今山八幡宮祭の行列	〃	〃		86表	94

表１　挿絵一覧

番号	対　　象	月　日	場　所	備　　考（描写など）	原本丁	復刻本頁
1	嶋鯛	4月8日	平　　塚	丁の右下，文中に描く	9裏	11
2	福住（宿とその周囲）	〃 10日	箱根湯本	鳥瞰図	13裏	15
3	福住の湯殿と池	〃	〃	間取図，部分色彩（鯉に朱）	14表	16
4	福住で休憩した座敷と庭	〃	〃	〃，〃（庭の樹木に朱）	14表	16
5	剣玉	〃	〃	文中に描く	14裏	17
6	福住の庭	〃	〃	部分彩色（鯉に朱）	15裏	17
7	三嶋明神境内	〃 11日	三　　嶋	略図	17裏	20
8	薩埵峠と浜辺	〃 12日	蒲　　原	見取図	19裏	21
9	稲葉源右衛門（宿）の庭	〃 13日	小 吉 田	若干座敷の見取図もあり	20表	22
10	大井川の渡し場	〃 14日	大 井 川	鳥瞰図	21表	23
11	中根甚太郎（本陣）の娘	〃 17日	岡　　崎	丁の右下，文中に描く	24裏	26
12	矢作川の船渡し	〃 18日	矢　　作	鳥瞰図	25表	27
13	白鳥丸	〃 19日	宮	側面図	26裏	29
14	白鳥丸の船内	〃	〃	間取図，一部のみ描く	26裏	29
15	石山寺境内	〃 23日	石　　山	鳥瞰図	31表	33
16	街道周辺	〃 24日	〃	〃	32裏	35
17	大きな螢	〃	〃	文中に描く	36裏	38
18	内藤家大坂屋敷の御宮	〃 27日	大　　坂	略図	37裏	40
19	内藤家大坂屋敷の奥	〃	〃	〃	37裏	40
20	高津宮石段	〃 28日	〃	〃，文中に描く	38裏	41
21	清水観音	〃	〃	鳥瞰図	39裏	42
22	ふく屋（茶屋）	〃	〃	〃	40裏	43
23	四天王寺境内	〃	〃	略図	42裏	45
24	〃	〃	〃	〃	42裏	45
25	住吉大社境内	〃	〃	間取図	43表	46
26	住吉大社拝殿	〃	〃	略図	43表	46
27	住吉神社門前	〃	〃	見取図	43裏	47
28	難破屋の庭の松	〃	〃	二階から見下ろす	44表	48
29	茶屋の座敷と庭	5月3日	〃	間取図	46裏	50
30	名物の箪笥三種	〃	〃	略図，文中に描く	47表	51
31	当地幼女の髪型	〃 5日	〃	丁の右下，文中に描く	50裏	55
32	内藤家御座船の内部	〃	〃	間取図，一部のみ描く	51裏	55
33	大坂川口の海	〃 6日	大坂川口	鳥瞰図	53表	57
34	和田明神と海	〃 7日	兵　　庫	〃	53表	57

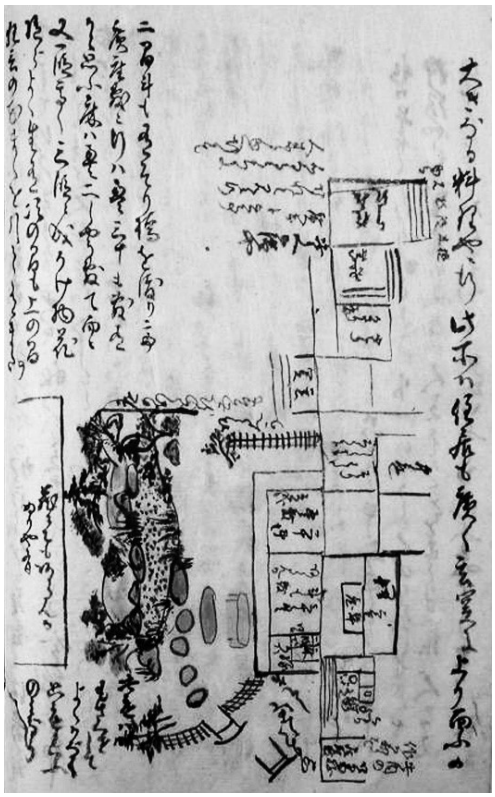

図１　休憩した茶屋の間取図

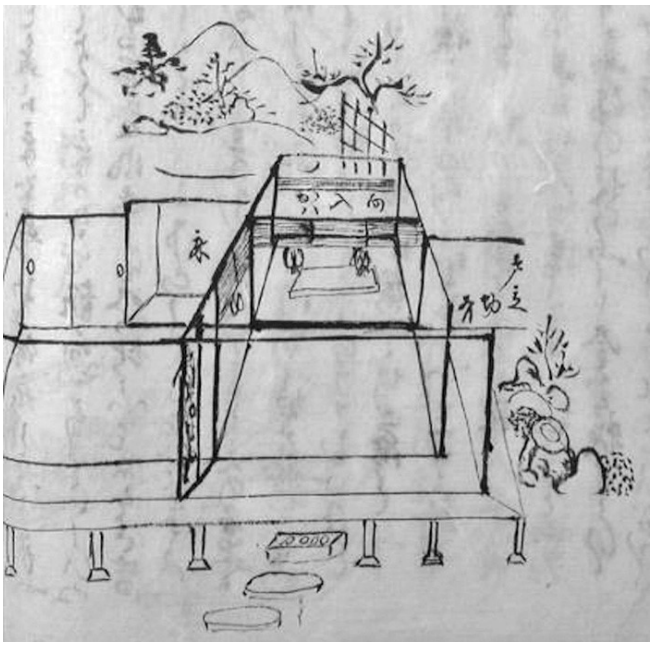

図２　吹抜屋台で描いた金刀比羅宮本坊内の座敷

充真院の挿絵の見所でもあり、かつ、その力量を示す挿絵は、丁の見開き、もしくは丁の表裏を用いてダイナミックにパノラマとして描いた風景である。この描き方は、長い旅において海路から用いられるようになる。始めてこの方法で描かれた挿絵は、五月九日の明石湊（播磨国）であり、五十五日間を費やした旅の三十三日目の記事である（図3）。以後、同十三日の大椨（備前国）の海と浜辺、同十七日の六嶋（備前国）の海辺と生簀、下苗（下内のこと、豊後国）の海と浜辺、同二十九日の嶋野浦（日向国）に入港する一行の船と海岸（図4）、同日の芹崎（豊後国）からの展望などである（図5）。パノラマとして描いたものは、都合六点である。

船に乗って海上から広々とした大海原が広がる景色を目にして充真院は胸に迫る思いがあったのであろう。その広大さを伝えるために効果的な方法として、このような描き方を試みたのだろう。

一方、丁の余白の一部に小さく、いわばカットの様に描いたものもある。具体的には、嶋鯛（図6）、剣玉（図7）、宿泊した本陣の少女（図8）、大きな蛍（図9）、高津宮の石階段、名物の箪笥、上方の幼女の珍しい髪型、お付の者が浜辺で地元の人に貰った奇妙な生き物（図10）などが、旅における挿絵として描かれている。

なかでも、剣玉、蛍、石段、奇妙な生き物は、文章の中、つまり文字の間に配置されている。これらは平成の今日、メールで用いられる絵文字のような雰囲気である。[12] 眺めていて微笑ましさを感じる。充真院は、読み手により理解しやすくすることを目的としてこのよ

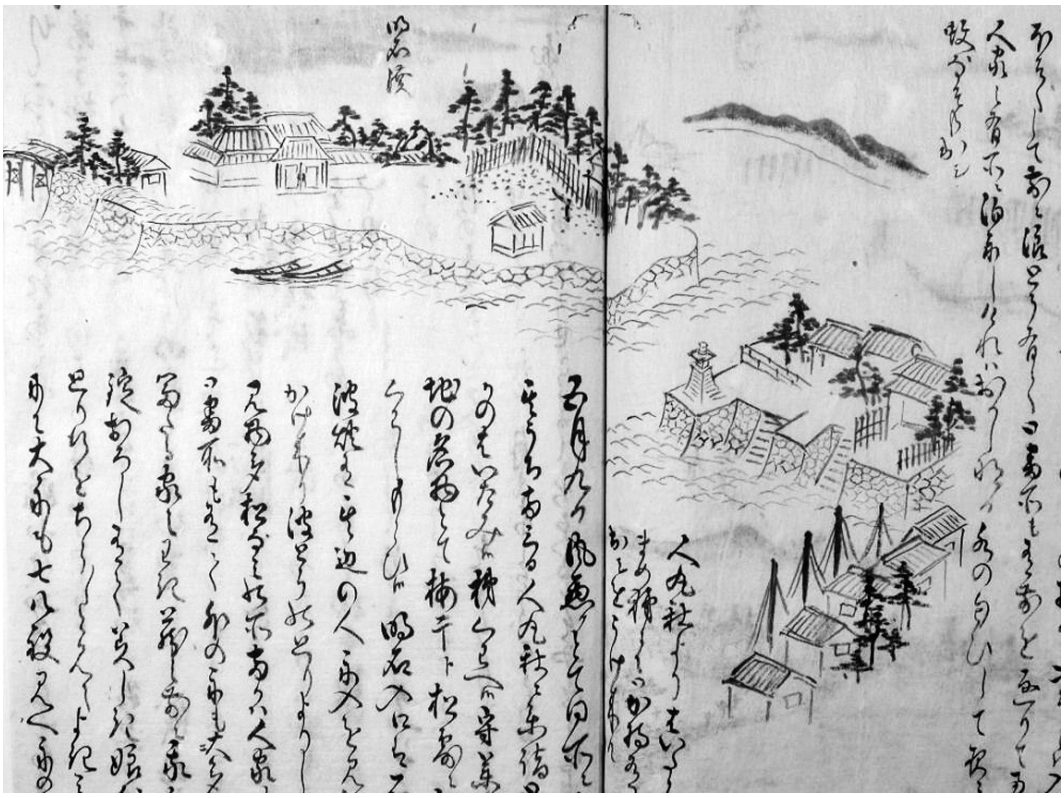

図３　明石湊

図４　嶋野浦入港

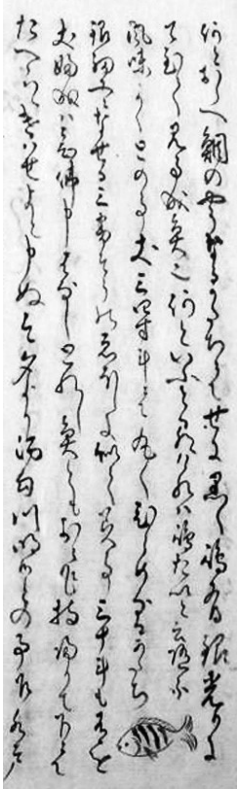

図6　嶋鯛

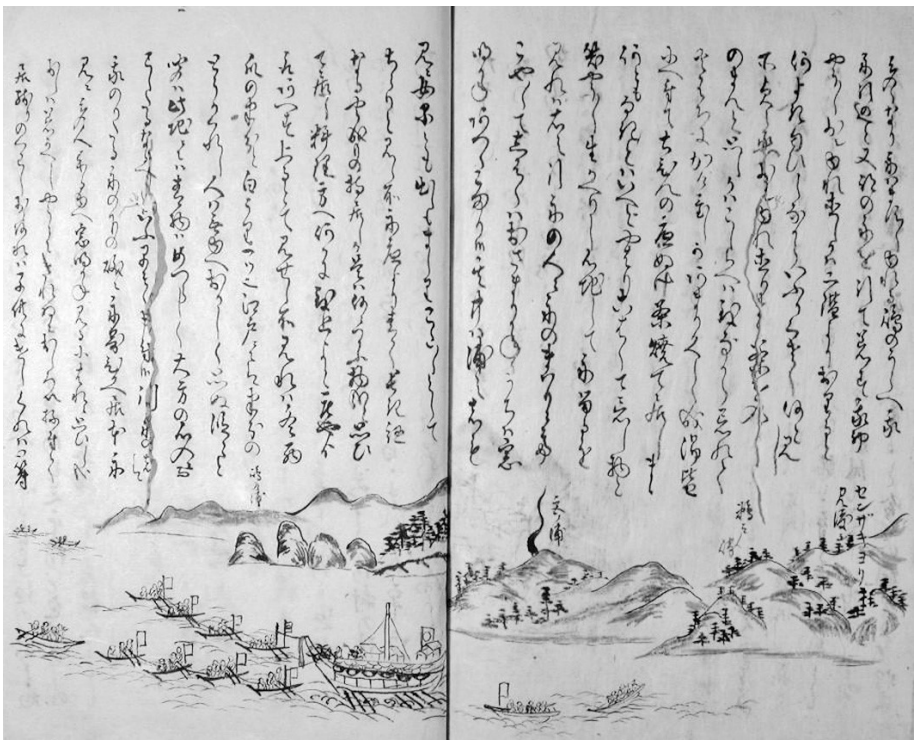

図5　芹崎からの展望

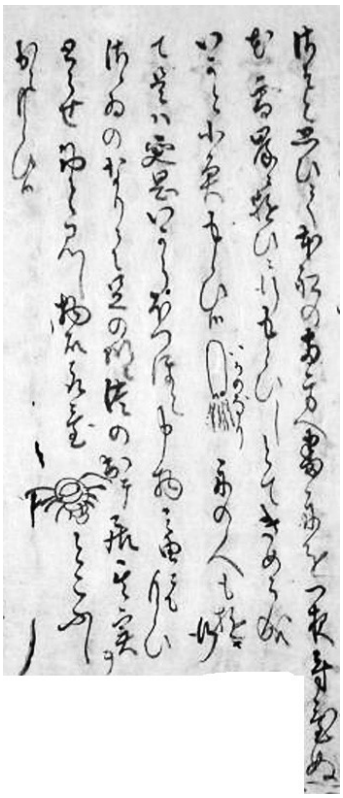

図10　奇妙な生き物

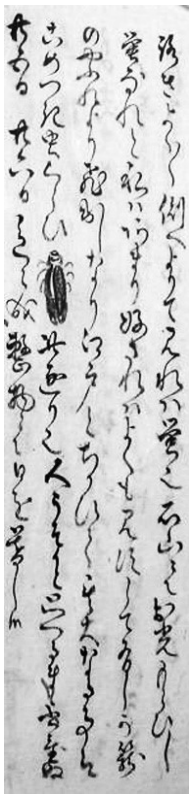

図9　蛍

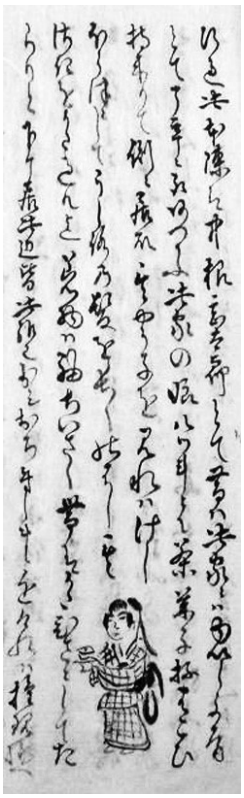

図8　宿泊した本陣の少女

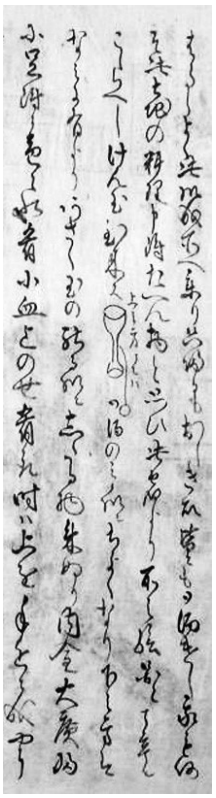

図7　剣玉

うな描き方をしたのであろうが、同時に充真院が楽しみながら筆を進めていたことが感じられる。さらに、文章中に配した愛らしい挿絵からは、充真院がお茶目な心を持ちあわせていた女性であることが伺われる。絵文字のような挿絵の存在は、挿絵全体の中では少ないものの、この旅日記に親しみ易さを醸し出しており、それは描き手である充真院の人物像のイメージにも共通するものである。

挿絵は大部分が墨一色で描かれているが、彩色を施したものが五点ある。それは、福住の湯殿の側の池の鯉、福住で休憩した座敷から見える庭の樹木、福住の庭の流れの中で泳ぐ鯉、亀嶋と共に描かれた日の出の太陽と海、金刀比羅宮の金光院玄関脇の植え込みなどである。

彩色は朱、薄藍、薄緑の三色のみである。朱は鯉と太陽、樹木、植え込みなどに用い、薄藍は海、薄緑は植え込みに施している。ごくわずかとはいえ、小さいながらも朱で描かれた鯉は、充真院の的確な筆さばきで最小限の線で生き生きと、かつ鮮やかに描かれている。樹木に用いた彩色は、実に控えめで上品であり、あたたかで柔らかな雰囲気を漂わせている。一方、亀嶋の日の出と海の箇所は、丁の上部隅にささやかに描かれた物ながら、色使いがひと際鮮やかである。

なお、多くの挿絵はビジュアル情報としても有効なものといえる。挿絵の存在により、充真院の細やかな文章表現を、より具体的に補強して理解することが可能となる。なかでも、前述した五月二十九日の嶋野浦入港と芹崎からの展望には、海辺の風景と共に、充真院が乗船する御座舟も描かれている点、貴重である。

一連の挿絵を眺めていると、充真院は、たいへん絵心があった人物で、絵を描くこと自体を心から楽しみ、好んでいたことが伝わってくる。[13] それに加えて挿絵を描いたのは、自らの感動の反映であり発露であると共に、未知であった事物を書き留めて記憶に定着させようとするものでもあり、これらは自分自身の為の行為といえる。さらには一般的に知られていないものを、この旅日記の読み手となるであろう内藤家の人々に、よりわかり易く伝えるためでもある。したがって、知られているものについては、わざわざ挿絵を描かないことにしているのである。これについては、例えば四月二十三日に訪れた瀬田（近江国）の景色について、「聞し通、けしきもよきなから、人々のしる所ゆへ絵かゝす」とあることによる。[14]

一方、感極まったためか、挿絵を描けなかった場合もある。それは旅の最後で延岡に到着した時のことである。船中の充真院一向を出迎えるため、浜辺に延岡の用人をはじめとする役人の面々が平伏し、さらにその後ろに大勢の男女が敷物をしいて出迎えてくれた様子を目にした時であった。充真院はその時の心情を「誠にりゝ敷嬉しくて」と表現しており、さらに「其様子を見、此気色は中々絵にも尽しかね」と記している。[15] 盛大なお出迎えであり、まさにこの旅のフィナーレを飾る一大場面であったが、むしろそれ故、挿絵を描ききれなかったのである。

それにしても、充真院は実に卓越した文才と画才を兼ね備えた稀有な人物であった。ゆえに、その手による「五十三次ねむりの合の手」は、極めて魅力的な旅日記となったのである。

（1）充真院は寛政十二年（一八〇〇）生まれである。当時は数え年なので、本稿では六十四歳とした。なお、従来の指摘では柴氏が『近世おんな旅日記』の八九頁と『近世の女旅日記事典』の二八八頁で、この旅をした時の充真院の年齢を満年齢で六十三歳としている。充真院の人生の概要については、明大翻刻本の二六六頁や『内藤家文書増補・追加目録9　延岡藩主夫人　内藤充真院繁子著作集1』の一八四頁に説明がある。さらに、「はじめに」の註（1）でふれた伊能氏論文の十七～十八頁にも充真院の人生について説明がある。

（2）明大翻刻本、七頁。旅に出る理由やその心情については、従来、本書を紹介した柴氏や伊能氏らが、充真院が江戸を離れることを痛切に悲しんでいたことなどを指摘されている。当該箇所は柴氏の『近世おんな旅日記』の八九頁、同氏の『近世の女旅日記事典』の十七～十八頁、伊能氏論文の二四～二五頁などである。

（3）旅についての記述は明大翻刻本の七～八七頁、延岡に居を移してからの見聞は八七～九四頁である。なお、原本は旅についての最後に「水無月二日着」と書いて筆を一端留めたようである。延岡の記事は、丁を改めたうえで、次の丁から記している。

（4）明大翻刻本、二五頁。同頁十行目の「朝七ツに支度し立出る比に…」から十六日の記述が始まる。

（5）右同書、四九頁。

（6）右同書、三一頁。

（7）右同書、五四頁。

（8）この旅日記の魅力の一つである素直な感情や会話の描写については、充真院の人間像についてふれる次稿で具体的に示したい。

（9）「五十三次ねむりの合の手」の挿絵の数について、明大翻刻本の二六七頁と伊能氏論文の十八頁では、五十点余りと指摘されている。この度、本稿執筆に際して、挿絵を数え直してみた。同じ丁にしたためてあるものでも、事物として異なる物を描いている場合や、見聞の時期・場所が異なる場合は、それぞれを一つずつの挿絵として数えた。さらに、原本を確認してみたところ、丁の表裏に続けて一つの絵をしたためた場合もあり、一見すると二点の挿絵のようだが、実は一点である場合など、原本でなければわかりにくい点もあった。加えて、翻刻する際に、活字としての文章の配置と挿絵との関係を十分に配慮しておられるものの、必ずしも原物と同じ位置に挿絵を配置することが叶わず、配置を換えざるを得ない場合もいくつか見られた。そのような点に留意しながら、原本から事物ごとに数えたところ、「五十三次ねむりの合の手」の挿絵の点数は六十五点という結論になった。

（10）表1に原本と明大翻刻本の当該箇所を示しておいたので、以下の挿絵に関する考察では、註記は省略する。なお、挿絵は翻刻に際しては、文章の配置の関係から原本とは位置が異なる場合があるので、表1には原本の当該丁とその表裏を記した。なお、従来の研究で図版として紹介された挿絵は、柴氏が『近世おんな旅日記』の九〇頁で福住の宿の外観の図と湯殿と座敷の間取図、石山寺の図、さらに同氏は『近世の女旅日記事典』の二一九頁で備前大橋の海、二八九頁には前掲書で紹介した福住の湯殿と座敷の間取図を再度掲載されている。伊能論文は三三頁に本陣の娘の挿絵を掲載している。

（11）従来の研究で充真院が間取図を描いたことについては、柴氏が『近世おんな旅日記』の九四頁に掲載した「海陸返り咲こと葉の手拍子」の金比羅山金光院の挿絵の説明の部分で「充真院の得意とする間取り図…」と指摘している。

（12）文章の中に絵文字のような挿絵を豊富に描いた充真院の著作としては、『内藤家文書増補・追加目録9　延岡藩主夫人　内藤充真院繁子著作集1』に収載されている「色々見聞したる事を笑ひに書」がある。なお、絵文字の様な挿絵を描いた先例としては、天明二年（一七八二）

刊行の『豆腐百珎　全』（複製本・江戸時代料理本集成・臨川書店・昭和五十三年）の「石焼とうふ」（二十丁裏）や「包油煠」（二三丁表）で、珍しい道具や包み方を説明する際に用いた様子があげられる。

(13) 明治大学博物館が所蔵する充真院の蔵書のなかには、「東御用　御鏡付形」（架号(3)充真院（繁子）関係（Ⅱ）20）や「御細工下え」（架号(3)充真院（繁子）関係（Ⅱ）28）など、絵に関する物が含まれている。

(14) 明大翻刻本、三二頁。

(15) 右同書、八三頁。

三　旅の概要と一行の隊列・船

次に、旅の行程の概要についてみてみよう。「五十三次ねむりの合の手」は、前述したように五十五日間の旅である。[1] 江戸で充真院が居所としていた内藤家の下屋敷である六本木屋敷を出発し、東海道を下り、大津からは洛中を通過せずに伏見に進み、伏見から舟で淀川水系に入り、大坂にある当家の屋敷にしばらく滞在して、その後、海路で延岡に向かった。

旅の期間は当初から厳密に決まっていたのではなく、出発日こそ決めたものの、到着日は概ねであり、道中の行程の都合によるものであった。それは、次の点から伺い知れる。二十五日目である五月一日の記述であり、内藤家の大坂屋敷[2]に暫く滞在して大坂見物をしていた折のことである。「もはや大坂にもあきたれは、五日に乗舟と定申候」[3]と、充真院が大坂滞在に飽きたので、それを契機に旅の再開を五日と決定していることによる。これに加えて、幕府側の通行の事情もさらに影響していたのだか、いずれにしても道中の過程で日程を決めているのである。

同様の様子が旅の終わりの六月一日からも確認できる。延岡に舟で到着した充真院一行の所に延岡の用人忍左志馬が挨拶にやってきて、「今日上陸して着致哉」と尋ねたことに対して、「皆々少々は髪にても結ねはならす、明日と申出し」と、一行の人々は少しは髪を整えたいということ、すなわち身だしなみを整えたいということを理由として、延岡に上陸する旅の最終日を翌日の二日にすることを、延岡の河口の舟中で決定しているのである。[4]

以上のことを念頭に置くと、この旅の過程で時折延岡に使者を先行させて、道中の過程を報告しており、延岡側はそれに従って出迎えの準備を進めていたであろうことも推測できるのである。

なお、この充真院の旅は陸路と水路を併用している。陸路が主であるのは旅の前半で、江戸を出発してから伏見まで、その後、伏見から舟で大坂の内藤家の屋敷に到着し、暫く大坂を見物した後に、大坂屋敷を出発して延岡に向かう旅の後半は海路である。すなわち陸路は、旅の第一日目である四月六日から第十八日目の四月二十三日までの十八日間である。その後、第十九日目の同二十四日は河川を舟で下り大坂屋敷に到着、第二十日目の二十五日から第二十八日目の五月四日までの九日間、大坂屋敷に滞在した。そして海路は第二十九日目の五月五日から第五十五日目の六月二日までの二十七日

間である。実は水路に日数を費やした旅だったのである。

不本意ながらも江戸を離れなければならないという精神的な辛さに加えて、長期間の旅そのものが、高齢である充真院にとって体力的にも過酷な負担となったはずである。そのような中、大坂の内藤家の屋敷に到着してから九日間を過ごした。長い旅路において疲れた身体を回復できる何よりの休憩となったことであろう。大坂屋敷での充真院は、屋敷内で一日を過ごすこともあったが、寺社参拝をして見聞を楽しんでもいる（詳細は別稿）。

陸路では、大名家の一行であるので隊列を組んで目的地へ向かっている。この旅における隊列の具体的な構成は、充真院の文章には特に記されておらず判明しない。とはいえ、隠居である充真院の乗る駕籠は、天保十年（一八三九）に鎌倉の菩提寺光明寺を参拝した時の隊列と同様に、質素な御忍駕籠を使用したものと思われる。[5] 充真院は陸路ではたいてい駕籠に乗っている。名所や寺社見物の際に駕籠から降りるものの、道中の途中、必ずしも快適とは言い兼ねる乗り物である駕籠ゆえ、お側の者たちは充真院を気遣って駕籠から降りて歩くよう勧めるが、それでも充真院は皆の勧めに従うことは稀であり、駕籠に乗り続けることの方が多かった。[6]

一行の隊列は、通常は粛々と街道を進んでいたようである。加えて、隊列は常に整然としていたのではなさそうである。それは、太田氏の城下町である掛川を通行した時の様子から推察できる。四月十四日に掛川の城下町を通行する際に、「太田様御領分成故、皆揃行、少しも人の多様に見せ」[7]というように、太田氏の領地なので先方に対する礼儀を尽くすため、さらに内藤家としても自らの格を保つべく、隊列を整え、行列の人数が多いように見せようとしたのである。

そして太田氏側から挨拶の役人がやってきたので、ここから「下に〳〵」という先払いの掛け声と共に城下町を通行したのである。つまり、太田氏の領分であり、先方から出迎えの役人が到来したので、そこから大名家の行列らしく、先触れの掛け声と共に通行したのである。掛川藩主太田氏と内藤家は親戚関係にある。当時、内藤家の藩主に就任していた政擧は、この掛川藩主太田資始の三男であり、前年の文久二年（一八六二）十月に内藤政義の跡継ぎとして養子に入ったばかりであった。[8]

充真院が「下に〳〵」の掛け声を伴う通行についてあえて書き留めていたのは、このような通行は、むしろ稀だったからである。なお、一泊した翌日に掛川城下を退去する際にも、再び掛川藩の役人が見送るなかで、充真院一行は先払いに導かれて通行したのである。[9]

さらに同月十五日に、見附から浜松に向かう途中で、「其うちにおくれし人々も来りて」とあるように、隊列から遅れて行動している者の存在が確認できる。[10] おそらく一行のために折々に必要となった用事に従事していたためであろう。このように常に随行員全てが一団となって行動しているのではないのである。

次に船について見てみよう。河川を下ったのは伏見から大坂屋敷

までの間の淀川水系である。四月二十四日に、内藤家の持ち舟が伏見の船着場まで一行を迎えにきた。この舟は十間（十八メートル）余りの大きさの帆船で、紫の紋付の幔幕を張っていた。舟の両側の縁に手すりが設けてあり、部屋は二畳ほどの上ノ間と三畳程の次ノ間、さらに他にも部屋があり、後方に用所があった。舟は少なくとも二艘用意されており、一行は分かれて乗船した[11]。

海路は、大坂屋敷から延岡までの間で、内藤家の持ち舟である関船を使用した[12]。この船の外観は五月二十九日に嶋野浦付近の風景を描いた際に、描き込まれている[13]。挿絵から、二階が設けられた大きな御座舟であることが見てとれる。実際に、充真院の記述にも「二階」と明記されている[14]。船の長さは「二十間」（およそ三十六メートル）[15]で、帆柱の高さは推定で十八間（およそ三十二メートル）程もあったという[16]。大名家ならではの実に堂々たる船だったのである。挿絵には大きな帆柱や櫓も描かれている。

船内の間取図の一部を、充真院は旅の二十九日目である五月五日に挿絵として描いている。この間取図によると、三畳程で区切られた部屋が複数あり、四畳の部屋もあった。船中なので、小さい部屋で構成されているようである。部屋は畳敷きと板敷きとがあった。台所や簡易な厠、湯殿、物置を設置していたことがわかる。舳先の方には船子が控える場所があり、その先には合図として打ち鳴らす太鼓を設置していた[17]。

充真院が乗船する船については「本舟」「本船[18]」と称しており、したがってさらに複数の舟が従っていたであろうことが伺われる。本船には「紫の藤の丸紋たる幕」、すなわち内藤家の家紋である下がり藤を染め抜いた紫色の幔幕を張っていたという[19]。

なお、道中において他の大名家の船を利用したこともある。第十四日目の四月十九日は、陸路ではあるが桑名の渡しの箇所のみ海路であった。この折、充真院の一行は、尾張藩の配慮により尾張藩の御座船である白鳥丸を渡しに利用している[20]。この船は、「御召ふね、公方様御上洛之節御乗被遊、其様には出し不申、此度はかく別之あひたからゆへ、この方に計出るとの事」というように、白鳥丸は将軍が上洛する時に乗船する特別な船であるが、今回は尾張藩と内藤家とは特別な間柄であるので、利用させてくれることとなったという[21]。

尾張藩と内藤家との特別な間柄とは、内藤家の藩主であった政脩（まさのぶ）――旅の当時の藩主政義の四代前の藩主。藩主に就任していた時期は明和七年（一七七〇）から寛政二年（一七九〇）――が、尾張藩主であった宗睦の末弟であり、内藤家に養子に入り、藩主政陽の家督を継いだことによる。両家は親戚関係にあったのである。それゆえ尾張藩から、破格な待遇を配慮されたと充真院らは受け取り、ありがたく思ったのであろう。

この旅の行程は、内藤家の参勤交代の経路と同様とみなしてよかろう。旅の後半の海路について、実は興味深い史料がある。それは、「海上の図」という巻子本のことである。「海上の図」は、「五十三

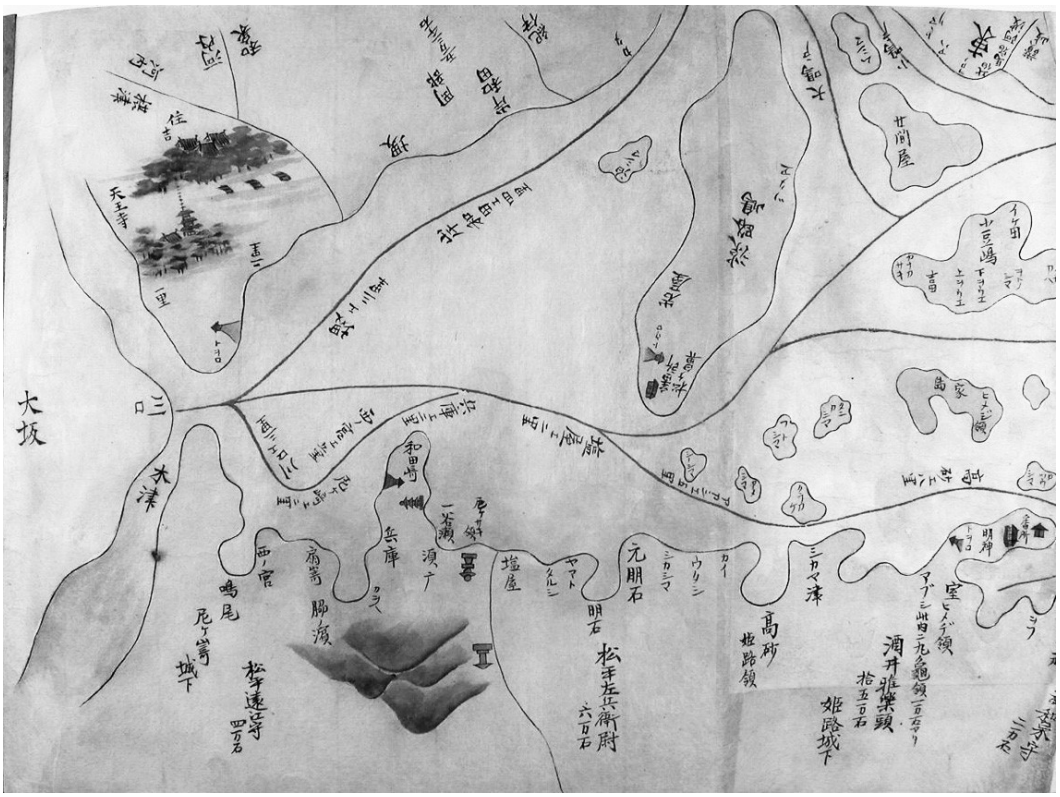

図 11　「海上の図」出港地・大坂の河口と瀬戸内海

次ねむりの合の手」と同様に、一連の充真院関係文書と共に平成五年に内藤家から当時の明治大学刑事博物館に寄贈された史料群の中の一つである。[22] したがって、その来歴は藩政文書とは異なり一大名家としての家文書とみなしてよかろう。「海上の図」は、当時、充真院が所蔵していた物なのか否かは、現在の時点では保留しておきたい。[23] しかしながら、家文書として存在していたということは、今後、「海上の図」の位置づけを考察するにおいて留意すべき点である。

「海上の図」は、大坂川口、すなわち安治川の河口から延岡までの海路を描いた地図である。沿岸の地名や様々な海路及び各地に向かう距離、方角の目安になる山、海岸沿いの灯篭、番所など、航海に必要な事項が簡潔に示してある。手書きの地図で、文字は墨書だが、陸地は黄土色、山や木は緑と茶、海路は朱などの彩色を施してある。その他、大坂の四天王寺（地図では天王寺と表記）や宮島（安芸国）、金刀比羅宮など著名な寺社などは、堂社の略図が小さいながらも朱・緑などを用いて描いてある。右の寺社のうち、四天王寺と金刀比羅宮は「五十三次ねむりの合の手」の旅で立ち寄り参拝した場所でもあった。到着地であり入港した船が待機した地に程近い延岡の関権現も、鳥居は朱、社の森は緑と茶で彩色して記してある。

充真院が旅日記でふれた地名が「海上の図」に出てくるので、この地図で確認しながら「五十三次ねむりの合の手」を読み進めると海路がよく理解できる。ここに参考までに、「海上の図」の冒頭で

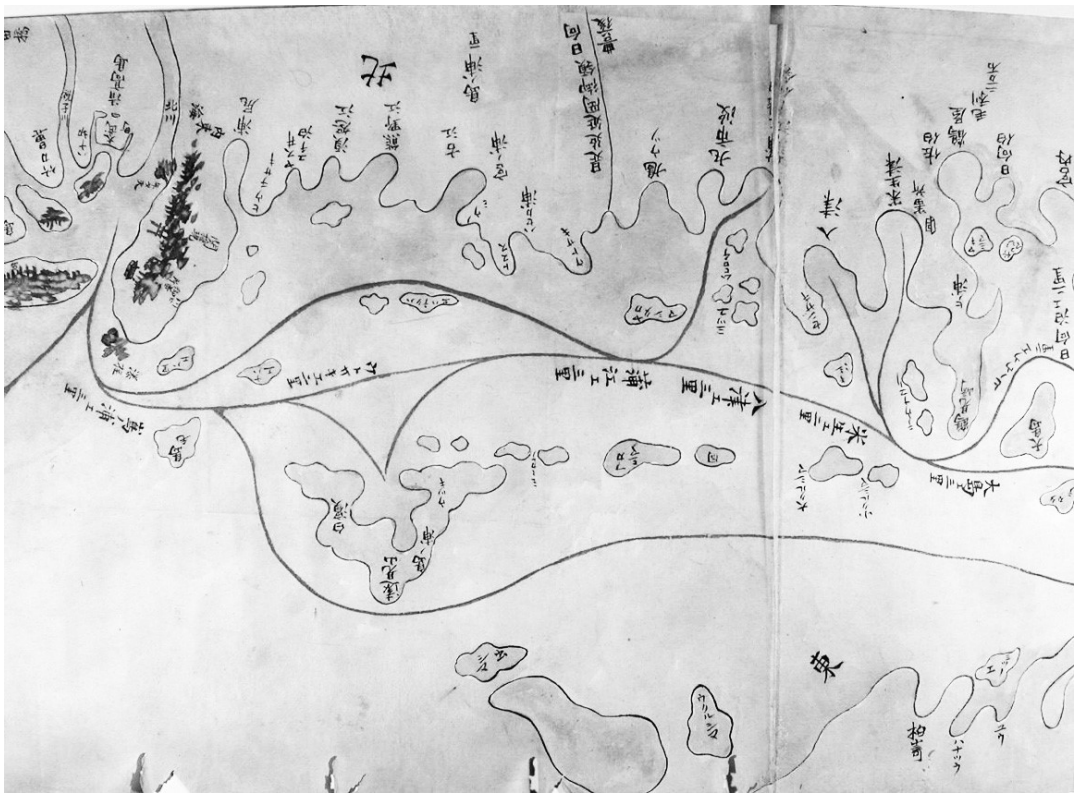

図12　「海上の図」到着地・延岡の河口と日向灘

あり、海路として瀬戸内海に出る大坂の安治川の川口（図11）からの様子と、到着地である延岡に入る付近の様子を描いた箇所（図12）を掲載しておく。

（1）「五十三次ねむりの合の手」にしたためられたこの旅の行程については、伊能氏が前掲論文の二二～二四頁に詳細な一覧表を作成されて掲載している。

（2）内藤家の大坂屋敷は、「門前に舟よせさするに」とあるように、門前に舟を着けることができる水運に便利な場所に位置していたことが、四月二十八日の記述（三九頁）から伺われる。幕末に作成された木版刷の古地図である「弘化改正大坂細見図」（播磨屋久兵衛版、弘化二年三月刊）や「改正増補国宝大阪全図」（河内屋太助・伊丹屋善兵衛・積典堂蔵版、文久三年刊）――いずれも玉置豊次郎著『大阪建設史夜話』（財団法人大阪都市協会発行、昭和五十五年）の附図である『大阪古地図集成』に復刻して収録されている。前者は第十四図、後者は第十五図である――で確認すると、内藤家の大坂屋敷は堂島川（淀川の下流、さらに下流は安治川）が三本に分岐した中洲の新地五丁目に位置する。内藤家の敷地の東隣は久留目藩、西隣が中津藩の屋敷である。南側と北側は分岐した堂島川に挟まれており、門前に舟が着けられるという前述した充真院の記述に納得がいく。充真院は大坂屋敷内のうち、滞在中に自らが過した奥の配置を略図として挿絵にしている（四〇頁の下部）。さらに、江戸の内藤家の屋敷よりもりっぱな稲荷様・生目様・八天狗様の社があり、掲げてある額もすばらしく、加えて立派な鳥居や石灯籠を配していたという（三九頁・四九頁）。なお、これら大坂屋敷内の御宮の略図が挿絵として描かれている（四〇頁の上部）。

（3）明大翻刻本、四九頁。

（4）右同書、八三頁。

（5）充真院が天保十年（一八三九）に鎌倉の菩提寺光明寺を参拝した時に乗った駕籠が御忍駕籠であったことは、明治大学博物館が所蔵する

内藤家文書の「充真院様鎌倉御廟参調」（史料番号…第一部・四家・四一一）の中の一点である「充真院様鎌倉御廟参御行列」から確認できる。その件については、拙稿「日向国延岡藩内藤充真院の鎌倉旅行――光明寺廟所参拝と名所めぐり――」（『城西人文研究』第三〇巻、二〇〇九年）の五一～五二頁で明らかにした。

（6）四月十一日に充真院は「ちと歩行せよ」と、少し歩行をすることを勧められたが、「あゆむ心もなくて」と、従っていない（二〇頁）。二日後の十三日も皆からたいくつなので少し歩くようにと勧められるが、やはり駕籠から降りなかった（二三頁）。さらに十五日にも歩行を進められたが、駕籠に乗ったままであった（二五頁）。

（7）明大翻刻本、二四頁。

（8）掛川藩太田家が内藤家十五代藩主である政擧の実家であることについては、伊能氏論文の三三頁に指摘がある。

（9）明大翻刻本、二五頁。

（10）右同書、同頁。

（11）右同書、三五～三六頁。伏見からの船が少なくとも二艘だったと思われる理由は、「四郎兵衛・茂兵衛外の舟、私乗し舟は奥附と女計」とあるので、一行が少なくとも二艘に分乗したことが確認できるからである。当該部分は三六頁である。

（12）「せき舟」という表記は、五月十七日（右同書、六八頁）に見られる。

（13）右同書、七九頁。当頁には御座舟を描いた絵が二点ある。一つは島野浦に入港する様子の図、もう一つは芹崎から見渡した視点で描いた図である。そのうち、芹崎から見渡した視点で描いたという挿絵の御座船の方が、島野浦入港の挿絵よりも詳しく描かれている。幟旗に艪、人の姿も描いてある。芹崎から見渡して描いた挿絵には、充真院一行の船と共に、引船がたくさん描かれている。

（14）「二階」と記載した箇所は、五月五日の五六頁、六月一日の八二頁などである。

（15）右同書、五五～五六頁。

（16）帆柱の高さについては、六月一日の記述に「跡にて聞は、帆柱は十八間もあらんか」と、後日譚としてではあるが推測の高さを示してある。当該部分は、右同書の八二頁である。

（17）船中の部屋などについては、五六頁に詳しい。随行員の部屋割りについても同頁に「はしこ有所之前を砂野・長をつめ所にし、船の入口之前之所を台子として、向之方は側の居所、其次を役所之居所」と説明している。

（18）右同書、五五頁。

（19）右同書、五五頁。

（20）充真院は挿絵として白鳥丸の外観と船内の一部の間取図を、略図として描いている。それは右同書の二九頁である。

（21）右同書、二八頁。

（22）架号は、内藤政道氏寄贈書のうち、(4)その他の八八である。

（23）内藤政道氏寄贈書は、全体を(1)内藤義概（義泰）関係、(2)充真院（繁子）関係（Ⅰ）、(3)充真院（繁子）関係（Ⅱ）、(4)その他、として四分類としている。その他に含まれるものは、「海上の図」の他は、同じく海図である「海瀬舟行図」の二点が近世の史料であり、他は明治期に編纂された「磐城誌料」が二点の都合四点である。この四分類は、明治大学刑事博物館が内藤家から寄贈を受けた際に、あくまでも便宜的に分類したものである。したがって、充真院関係ではないということを否定することはできないのである。ちなみに、(1)内藤義概（義泰）関係の一〇と架号を付された「風山公御家集」は、充真院が義概の和歌を手写したものであり、充真院の手による史料であることから、充真院の史料を考察する際には充真院関係としても位置づけられる史料である。いずれにしても、「海上の図」が内藤家の家文書であるということは、充真院がこれを目にした可能性が存するのである。なお、右の目録の四頁に、「海瀬舟行図」は近世中期のものであり、内藤家の参勤交代の際の海路が描かれていると説明がある。

（次号に続く）

《Summary》

Concerns and Image of Naito Jushin-in (Nobeoka Domain, Hyuga Province) Observed from Her Travel Journal *Gojusan-tsugi Nemuri no Ainote* (1)

By Naomi KANZAKI

Here I analyze travel journal "Gojusan-tsugi Nemuri no Ainote" written by Naito Jushin-in, who was the wife of Nobeoka feudal load in Hyuga Province, to get some idea on who she was. Jushin-in in her later years traveled between Edo (Tokyo) and Nobeoka four times during the period from the latest Edo era to the earliest Meiji era and recorded her personal experiences as a travel journal each time. "Gojusan-tsugi Nemuri no Ainote" was her first travel journal. In (1), first I reveal some characteristics of the travel journal; for example, as this was her first travel of the four, her writing was vivid and rich in its contents, and the 65 illustrations inserted within text made her detailed descriptions more attractive. Then I discuss her travel route by land and sea.

Keywords: Naito Jushin-in, Nobeoka Domain, *Gojusan-tsugi Nemuri no Ainote*